錦城高校新聞

題字 井口 文章

再刊 第２７０号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2018

みんなでつくる
錦城高校新聞

今号は全面、東京公演特集!!

一面：国立劇場で優秀校公演の一日目

二面：二日目に公演した八校を取材

黒子や来場者に聞く国立の魅力

国立劇場　東京公演一日目

今年も国立劇場が熱い!!

第29回東京公演に編集委員が参加

文化部のインターハイと呼ばれる「全国高等学校総合文化祭」で優秀な成績を残した学校が、演劇・日本音楽・郷土芸能の3部門において国立劇場で公演を行う「第29回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演」が8月25日（土）、26日（日）に開催された。青春をかけた高校生たちの、魂を込めた公演の数々を紹介する。

（編集部共同取材）

音楽にあわせ巧みに縄を跳ぶ町田の丘学園のＤ－ｃｒｅｗ

息の揃ったダンスを披露 長野西高校

オープニング公演で2種類のダンスドリルを行った長野西高校バトン班。今回は、パワフルな「ソングリーダー」というダンスと、長野西高校バトン班が最も得意としている「ミリタリー」という目まぐるしく隊形が変わるダンスを踊った。

公演後、バトン班班長春原奈歩子さん（3年）は振りだけでなく、心も合わせないといけないところが大変だと話す。「全員で満足のいく演技をすることができたと思います」と語る。お客さんの息づかいや視線を感じられたことがリハーサルと異なり、本番は緊張したそうだ。今後に向けて「さらに人を感動させられる演技を練習していきたい」と抱負を口にした。

ノリノリのパフォーマンス 町田の丘学園

同じくオープニングを飾ったのは特別支援学校、都立町田の丘学園のダブルダッチ部D-crewだ。

今回の公演では、ダブルダッチだけでなくダンスやボイスパーカッションを『ＹＭＣＡ』『Rising Sun』『みんながみんな英雄』などの、ＣＭでおなじみの音楽にのせて、ノリの良い演技を披露した。

本番終了後、副部長の永野琴さん（2年）は額に汗を流しながら「リハーサルから課題であったフォーメーションが乱れることがなかったのでよかったです」と満足顔で振り返った。

部長の宮本佳奈さん（3年）は今回の公演を「95点のパフォーマンスができました」と評価。これからは東京パラリンピック開会式のパフォーマンスに選ばれることを目標に、日々の練習に力を入れると意気込んだ。

「詩をうたう」ように奏でる 東海南高校

愛知県立東海南高校邦楽部は開校とともに創部され、本年度で28回目の総文祭出場となる。公演には2、3年生28人で参加した。演奏曲『絃歌』は「箏をひき、詩をうたう」という意味。3張の箏の独奏に合わせて他の箏が演奏する形式となっている。

静かな会場に響きわたる箏の音色

本番後、部長の安藤怜南さん（3年）と副部長の明壁沙弓さん（3年）に取材すると、「今回は全国大会の反省を生かして後悔のない演奏ができました。最高の舞台に立てて嬉しいです」と笑顔。後輩には「総文祭連覇が夢。いい子たちなので頑張って欲しい」とエールを送った。

2人は、箏をひくことが好きなので部活を引退した後も演奏を続けたいと話していた。

繊細で流れるような曲で魅了 磐田北高校

静岡県にある静岡県立磐田北高校箏部は『風と光と空と』を演奏した。この曲はどこまでも吹き渡る風、限りなく広がる空を表現し、細やかなリズムと流れるようなフレーズを意識した曲となっている。

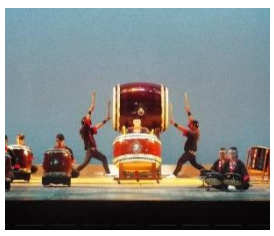
部長の鈴木美咲さん（3年）は本番前、受賞した文化庁長官賞に恥じないような演奏をしなければというプレッシャーもあったそう。本番を終え「ほっとしています。最後の舞台で練習通りにできてよかったです」と振り返った。

共に練習してきた後輩に向け「来年の全国大会はさらに上の賞を目指して頑張ってもらいたいです」と語る。今まで支えてくれた講師の先生、顧問の先生、保護者に感謝したいと話した。

無限をテーマに力強い演奏 飛龍高校

会場に太鼓の音色を響かせた飛龍高校は「無限」をテーマに掲げた。時間や空間、宇宙など限りない広さと奥深さを思わせると同時に、創造性の限りなさを表した無限。未知へ挑戦し、自分たちには底知れぬ力があることを知ってもらうことを目的とした。

公演を「国立劇場で演奏するのは初めてだが満足することができた」と部長の鈴木颯太くん（3年）は振り返る。国立劇場の会場は他の場所とは違い、観客との距離が近い。副部長の勝亦青空くん（3年）は「自分たちの表情を見てもらい、保護者や先生方に対して感謝を伝えたかった」と真剣に語った。鈴木くんによると、3年生の引退は10月末。引退するまで自分たちの演奏を磨いていくという。



掛け声で息を合わせる

激しい動きが特徴的な神楽 由布高校

庄内神楽『貴見城』を披露した大分県立由布高校。鬼のお面を被った4兄弟の神が海神の助けにより、海神の宮である貴見城に訪れるという物語だ。大太鼓や小太鼓を中心とした軽快なリズムから始まり、その後は着物の袖を頭にかぶせたり、刀を振り回したりと、神楽に特徴的な激しい動きが最後まで続いた。

本番を終えて部長の荻本司くん（3年）は「今はやり切ったという気持ちが大きいです」と話す。リハーサルとは異なり、大勢のお客さんの前で踊ることは緊張したそうだ。

今回の公演について荻本くんは「自分達の代で国立劇場という最高の舞台に立つことができて良かったです」と語った。

1時間以上の「一人芝居」 松本美須々ケ丘高校

シェイクスピアの『マクベス』をマクベスの夫人視点から描いた『M夫人の回想』。東京公演唯一の「一人芝居」だったが、プロジェクションマッピングや階段付きのセットなど、工夫を凝らした迫力のある演劇だった。1時間を超える上演時間、たった一人で舞台上に立ち続けたのは下畑美歌さん（2年）。「本番は緊張せず、楽しもうという気持ちで臨みました」と上演後に振り返る。音響担当の越田笑叶さん（2年）も、完璧に近いパフォーマンスが出来たと話す。

今回の公演を通して、部長で大道具担当の奈良遼平くん（3年）は「プロの方から舞台のいろはを教わることが出来ました。これからに活かしたいです」と抱負を語った。

迫真の演技で観客を引き込む

高校生の友情物語 松戸高校

劇『Time After Time ～インディアンサマーより～』を演じた千葉県立松戸高校。舞台は学校の教室。不登校の夕子と、夕子が教室に戻れるように奮闘する朝香の友情と命の物語だ。教室の小道具もリアルに表現されていた。

本番を終えて部長の外尾風音さん（3年）は「国立を目標にして一歩ずつやってきたのでとても嬉しい」と笑顔で語る。「とにかく全部が楽しかった」と副部長の髙橋菜々香さん（3年）。3年生は今回の公演で引退だが、学校でも演劇の授業があり、これからも続けていくそう。夕子役の栗原七海さん（3年）、舞台監督の川村真衣さん（3年）も合わせた3年生は「入ってよかったと思える部活にしてほしい」と後輩に笑顔でエールを送った。

おもてなしの心で来場者と交流

お茶とお菓子でまったり休憩

東京公演では、国立劇場2階に高校生が呈茶をしている入場券を受け取ることで、次の休憩時間でお菓子とお抹茶をいただける。国立劇場を訪れた人なら誰でも受け取れ、お茶を頂きながら高校生がお茶をたてている様子を見ることもできる。呈茶をしているのは、東京都高等学校文化連盟茶道部門に所属している高校の学生たちだ。

呈茶をしている高校の1つである、東京都立富士高校茶道部部長の保坂小ゆきさん（2年）は「他部門との交流をなく、スタッフの方にも呈茶をしているんですよ」と語る。

副部長の大川原夏凛さん（2年）は、呈茶している時に演奏や演技の音が聞こえてきて、他部門に触れることが出来るのが好きですと笑った。

呈茶に訪れていた大石智子さんは「お菓子もお抹茶もとてもおいしかったです。普段なかなか触れることが出来ない部門だと思うので、接点を持つことができるのがいいところですね」と満足そうに話した。（巴）

裏方でも高校生が活躍

○司会係

2日間にわたり総合司会を務めたのは、共立女子高校の鈴木千晴さん（3年）、赤石花音さん（3年）、田中彩乃さん（3年）、都立上水高校の小林なつのさん（2年）の4人だ。

全員が進行を伝える放送だが、鈴木さんと小林さんはオープニングのアナウンス、赤石さんと田中さんは開演前の注意事項などを読み上げる「影アナウンス」も担当。4人は「伝えようとする気持ちが一番大事」と笑顔で語った。（梅）

伝えようとする気持ちを大切に

○舞台係

今回舞台係を務めた獨協高校1年の近藤陸くんと川下大成くん。公演期間中は出演者の誘導や小道具を扱うなどの裏方作業を担当した。出演する高校がどうしたら滞りなくスムーズな演技をできるかを常に考えながら仕事に取り組んでいるという。

「国立劇場に来るまで多くの大会を経験してきた高校の公演はどこもやっぱり一味違うな、と思います」と近藤くん。最後までしっかりと働きながら、全国レベルの高校の演劇をどんどん参考にして取り入れていきたいです、と2人は意気込んだ。（湊）

舞台係の大変さを語る2人

○受付係

国立劇場の顔である受付係。普段は演劇をやっているが、受付として国立劇場に関わった都立紅葉川高校の志賀賢太くん（2年）、都立深川高校の杉本孝太郎くん（2年）と古賀彩莉奈さん（1年）。受付係の主な仕事は、来賓を席に案内することとチケットを回収することだ。志賀くんは「学校の代表として誇りを感じます」と笑顔。杉本くんと古賀さんは「チケットを回収するときに仕事をしていることを実感します」とやりがいについて語ってくれた。（薫）

代表として誇りを感じると笑顔で話す

むらさき草

夏休みはいつも10時に起きるが、この日は6時に目を覚ます。国立劇場に向かう私の足取りは少し重かった。今年の国立劇場特集は、朝は9時から夜は20時まで、4日連続というハードな日程で取材活動を行うのだ▼取材初日、眠い目をこすって控え室に入るとすぐに仕事が始まる。「この学校の担当だれ？」「もうリハーサル始まってるよ！」。編集長の私には、そんな声が絶え間なく投げかけられた。控え室にこもりっきりで半日を終えた頃、ようやく取材に出かけることになった▼リハーサルを終えたばかりの、箏曲を演奏する東海南高校の部員に話を聞いた。部長は、夏休みも含め毎日活動をしているという。大変ではないのかと問うと「全てこの日のためにやってきたことなんです。全国でトップになって、お客さんに自分の演技をこの場所で見てもらう。その目標が心にあったから、きつい練習も頑張れました」▼私は気付いた。ここに来ている全員が、国立劇場を1つの集大成として、高校生活を過ごしてきた。そして私は、青春をかけて1つの作品を作り上げた学生達の、一生ものの記録をとっている▼作り上げた紙面を渡せた時、相手の嬉しそう顔を見て、新聞を制作して良かったと心から思うことができた。ただの情報媒体としてではない、私たちの作る新聞にこんなにも素晴らしい一面があるのだと新たに感じた▼無事に終わった国立劇場での4日間。数々の困難もあったが、それよりも大きなものを得ることができた。今回のような取材の機会を得られたことに、心から感謝したいと思う。そしてこれからもより良い記事を目指して、取材をする相手に一層気持ちを込めて取材活動をしていきたい。（巴）

国立劇場　東京公演二日目

華やかに舞台を飾った高校生たち

出演者が語る未来への抱負

華やかに舞う『花鳥風月伝』 東海大付属高輪台高校

東京公演２日目のオープニングを飾ったのは東海大学付属高輪台高校の吹奏楽『花鳥風月伝』だ。本公演の特徴は、吹奏楽だけでなく日本舞踊を同時に演舞する点。音楽と日本の伝統芸能が融合された、幻想的な空間を創り上げた。

本番後「感無量です」と話したのは吹奏楽部日本舞踊隊隊長の風間柚葉さん（3年）。「本番前は緊張や不安がありましたが、舞台に立つと楽しかったです。この舞台に出たことが奇跡のようでした」と振り返る。入部まで日本文化に触れることがあまりなかったという風間さんは、今後も日本舞踊を続けたいと語った。

力強い演舞で観客を圧倒する花巻農業高校の「鹿踊り」

美しく繊細な箏の音色 沼津西高校

静岡県立沼津西高校箏曲部は、美しい音色で『絃歌』を演奏した。『絃歌』は肥後一郎氏が作った曲で、華やかで繊細な音色を響かせた。

全国大会では緊張で上手く演奏することができなかったと話す部長の鈴木菜々実さん（3年）は「国立劇場では最大限の力で悔いなく演奏できて、清々しいです」と語った。副部長の眞田歩美さん（3年）は「全国大会では賞にこだわってしまいましたが、今回は思うままに演奏できました」と笑顔。「今回の『絃歌』で学んできたことを引き継いでほしい」と鈴木さんは後輩に向けエールを送った。

様々な波の変化を箏で表現 関西創価高校

「支えてくれた人たちに感謝の気持ちを伝えたい」という強い思いで、箏曲『波の詩』を演奏した関西創価高校箏曲部。この曲は宝石のようにきらめく穏やかな波や、歓喜にあふれ躍動する波など、波の変化が様々な技法で表現されている。

本番の演奏について「音をぴたっと揃えることができて、自分たちの団結力を実感しました」と前田美帆さん（2年）は満足げに話した。この公演をもって引退となった三好陽愛さん（3年）は「感謝の気持ちでいっぱいです」と笑顔。前田さんは「来年は全国2位ではなく、1位としてこの舞台に立ちたいです」と来年への思いを力強く語った。

大迫力の祭囃子と太鼓 輪島高校

輪島市で開催される、奉燈（きりこ）祭りの囃子と太鼓を舞台用にアレンジした大迫力の『輪島大祭』。演奏した石川県立輪島高校和太鼓部の部長の川端彩乃さん（2年）は、緊張したものの「楽しい輪島の祭りを表現できました」と話し、副部長の中山莉乃さん（2年）も「観客の人たちの表情がとても輝いていて、心の込もった演奏ができました」と振り返った。

演奏途中に観客から何度も拍手が起こる場面があった。地元の輪島大祭でも拍手が起こることがあるそうで「あの拍手がうれしかったです。本当の祭りの雰囲気をお客さんと共有できました」と2人は満足げに答えた。

力強い太鼓の音を会場に響かせる

力強く舞う鹿踊り 花巻農業高校

岩手の伝統芸能である「鹿踊り」を披露したのは花巻農業高校鹿踊り部だ。「鹿踊り」とは竹に幣束を巻いた長さ3メートル弱の「ささら」を背負い、総重量約15キロの装束をまとって激しく踊り謡う舞。部長の伊藤智哉くん（3年）は「踊りに関して部員と意見がぶつかることもあったので、体力的にも精神的にもきつかったです」と練習を振り返った。

踊りとスポーツの魅力の違いについて「踊りは踊り手の個性が現れる」とキャプテンの柏﨑圭祐くん（3年）は話す。二人は、これからも鹿踊りの素晴らしさを全国に広めたいと笑顔で結んだ。

高校生演じる「女性の弱さ」 立川女子高校

特別公演『えいえんのおさんぽ』を演じたのは立川女子高校演劇部だ。いわゆる「ＪＫビジネス」に焦点を当てたこの作品。「女子高の演劇部が、貧困などの女性がどうすることも出来ない弱さを題材にして演じることに意味があると思いました」と部長の田村萌絵さん（3年）は語る。終演後は最高の達成感で「演劇をやっていて良かったと感じました」と振り返る。演出などを担当したＯＧの齋藤のぞみさんと、同じくＯＧで舞台監督などを務めた今野愛美さんは親子の乱闘シーンが迫力満点でこれまでで一番の力を出せたと感じたそう。

３人は最後に「１００点の演劇でしたがこれは完全という意味ではありません。これからもパワーアップしていけると思います」と締めくくった。

明治の女学生の奮闘を描く 丸亀高校

公演の大トリ『フートボールの時間』を熱演した香川県立丸亀高校演劇部。女性が足を広げてフットボールをすることが出来なかった明治時代の丸亀高等女学校の生徒達を描く。

部長の長井ゆいさん（3年）はこの公演で引退。「幕が下りた時は本当に胸いっぱいでした」と話す。教師と女学生の対立のシーンで大きな笑いが起こり、会場があたたかかったと振り返る。「演劇は1人では成り立たない。感謝を忘れず、集団として成長して欲しいです」と後輩へエールを送った。

明治時代の女学生を熱演

地道な作業で舞台を成功へ

プロが語る「黒子」の世界

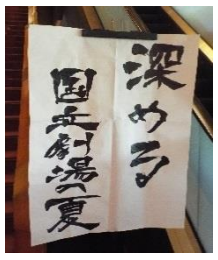
「失敗した事は良く覚えています」と岩本さん

公演２日目、舞台裏で衣装の整理をしていた、株式会社パシフィックアートセンターの岩本雄也さん。

国立劇場で黒子として10年ほど働いているという。裏方は大道具を持つこと大変なこともあるが、舞台転換がうまくいくと気持ちがいいと語る。黒子になったのは、小学生の時に学芸会で裏方をやったことがきっかけ。「色々あったけど、皆で1つの事をやってできたときは嬉しかった」と岩本さんは懐かしそうに黒子を目指した理由について振り返る。

印象に残っている舞台を聞くと「成功した舞台よりも、自分が失敗した舞台の方がよく覚えている」。成功して当たり前の世界なので、失敗を次の成功に繋げるようにしているそうだ。

思いを伝える書道



矢口さんの書いた看板

華やかな公演の裏側で、地道な作業を続ける人がいる。都立江北高等学校で社会科の教師をする矢口正樹さんは、東京公演で8年間、書道部門として活動している。書道部門の主な仕事内容は、劇場に展示されている作品の紹介カードや劇場の扉に貼る演目表、入り口に置く看板の字などを書くことだ。

名簿や演目表などは印刷物が主流の中、1枚1枚に心を込めて手書きする。作品の紹介を書く際には必ず作品の写真を見てから書く。払いひとつで雰囲気がガラリと変わるため「相手の思いをどうやって伝えるか」を考えながら書いているという。（英・加）

「虐待」という問題を訴える 仙台三桜高校

宮城県の仙台三桜高校演劇部が本番で演じた『宇宙の子供たち』は、兄弟であるケンジとタダシの宇宙旅行を通して、「虐待」という深刻な社会問題を世の中に訴えている。

社会問題を訴えかける

本番を終えて部長の後藤璃々花さん（3年）は「宮城県以外の人に自分達の劇を見てもらうことが出来て嬉しかったです」と笑顔で振り返る。副部長兼舞台監督の鈴木萌衣さん（3年）は「リハーサルに出来なかったことを本番で出来ました」と満足顔。後藤さんは「今までの演劇生活で人との関わり方を学びました。これからの人生に活かしていきます」と将来への抱負を口にした。

花巻を追った地元ケーブルテレビ

花巻農業高校の公演直後、出演者に取材していたのは花巻ケーブルテレビの照井敏樹さん。花巻農業高校の東京公演を受けて、岩手県花巻市から取材に来たという。以前、照井さんは地元の部活動を紹介するテレビ番組の取材で、花巻農業高校の部長の伊藤くんと主将の柏﨑くんのことを取材したことがあったそうだ。

照井さんは花巻の高校生のために東京まで取材に来るのは初めてだそう。「地元のケーブルテレビで働く者として誇らしいです」と花巻農業高校の東京公演について、話した。

花巻農業高校が東京公演をきく取り上げられた。照井さんは「大会に出場した高校生の、生の声を届けます」と番組制作に向けて意気込む。今回のインタビューは、毎週末に放送されるニュースで使用される予定だ。（巴）

高校生の生の声届けます

大会報告

女子バレーボール部
8月16日(木)
▽関東私立高等学校男女バレーボール大会
初戦敗退
8月19日(日)
▽東京都高等学校夏季大会
初戦敗退

体操部
8月11日(土)
▽都体協種目別大会
・平行棒
6位　髙山薫(3C)
8月26日(日)
▽高体連種目別大会
・跳馬
5位　田村七紗(1K)
・段違い平行棒
5位　田村七紗(1K)
・ゆか
6位　田村七紗(1K)

陸上部
8月16日(木)～17日(金)
▽多摩選手権大会
・200M
5位　岩川雄斗(1J)
8月22日(水)～25日(土)
▽東京私立中学高等学校対抗陸上競技選手権大会
・1000M
5位　井草守琳(1J)
・400M
2位　田中珠乃(2D)
6位　井草守琳(1J)
・800M
7位　田中珠乃(2D)

フットサル部
8月11日(土)～12日(日)
▽東京都フットサルチャレンジU―18第1トーナメント
ベスト8進出
8月15日(水)
▽夏の高校生フットサル大会2018
ベスト16

ハンドボール部
8月24日(金)25日(土)
▽東京私立中学高等学校ハンドボール部大会
2回戦敗退

来場者に聞く高校生の底力

○母校の晴れ姿を楽しみに

丸亀高校の開演前、ワクワクした表情を浮かべながら、劇場内のイスに座っていた小阪尚志さんは御年７３歳。

実は丸亀高校の卒業生で、今回母校の演劇部の後輩たちが東京公演に出ることを聞きつけ、はるばる香川から演劇を観に来たという。大変な演劇の指導をする学校の先生方に敬意を表しているそうだ。

小阪さんは「目立たないところでコツコツ練習してきた後輩たちの努力が、この公演を通じて大きく花開くことができてとても嬉しいです」と終始えびす顔だった。（李）

「後輩たちの努力が花開くのが、嬉しい」と話す小阪さん

花巻農業の公演に感動したという徳武さん家族

○家族で伝統芸能を鑑賞

東京公演の２日目に中野区から来た親子の徳武清美さん、祐紀くん（小3）、春樹くん（小2）に話を聞いた。

３人がこの公演に来たのは、おばあちゃんに勧められたからだそうだ。清美さんは花巻農業高校の『花農春日流鹿踊』（鹿踊り）に感心した様子。伝統芸能を見たのは初めてだったそうだが「とても素敵ですね」と高校生を称賛した。

祐紀くんは「４月から始めたクラブもあるのにこんなに上手く演奏できるなんてすごいと思いました」と興奮気味に語った。（葵）